

## <アジアの日本研究>19 中国における川端康成文学の研究

著者	周 閲
雑誌名	世界の日本研究
巻	2017
ページ	212-221
発行年	2017-05-30
特集号タイトル	国際的視野からの日本研究 : Japanese Studies from International Perspectives
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006660">http://doi.org/10.15055/00006660</a>

## 19 中国における川端康成文学の研究

周 関

川端康成は、日本で一番目、アジアで二番目のノーベル文学賞受賞者である。中国大陆でも注目される川端文学に関する研究は、社会の発展と意識の変化により、大きなうねりを経てきた。本文は、中華人民共和国成立以来60年間の川端研究を、可能な限り全面的に紹介する。まず先行研究に基づき、研究史を、中華人民共和国成立前～1966年、1966～1978年、1979～2009年、と三つの時代に分ける。そして、1979年から2009年までの30年間の川端研究の変遷とその主な特徴及び社会形態を分析し、総括する。また、文学研究と社会の変遷との相関関係を明らかにし、将来の研究を展望する。

川端康成（1899年6月14日—1972年4月16日）は、日本の新感覚派作家であり、1968年にノーベル文学賞を受賞した。川端は幼くして両親を亡くし、一生各地を転々として過ごした。それが彼の文学に深い影響を与え、彼は「葬式の名人」や「引っ越し魔」と呼ばれている。大学卒業後、横光利一と共に新感覚派の中心人物になった。創作は小説が中心で、長編小説より中短編小説が多い。作品は抒情性に富み、実際の生活を繊細に観察して優美に表現する筆致は、日本人の生活と精神をも表現していると思われる。川端康成の文学創作は、日本文学史上において重要な位置を占めるだけでなく、世界的にも注目を集めている。

### 1. 建国前から1966年の状況

中華人民共和国成立（1949年）以前、日本文学の翻訳や批評は五・四運動以後にピークを迎えたが、この時期の知識人たちは川端康成に関心を持たなかった。日本文学翻訳の先駆けである魯迅、周作人さえ川端に無関心であった。当時の川端は日本文壇において駆け出しの小説家であったからだろう。1930年「中国左翼作家聯盟」が成立してから1937年の日中戦争勃発まで、中国における日本文学の翻訳は主にプロレタリア文学に集中し、「新感覚派」を大きく掲げた川端康成は中国知識人の視野に入らなかった。日中戦争開始から中華人民共和国成立まで中国において日本文学への関心は低迷した。川端の文学も例に漏れず、1942

年に、川端の小説ではなく、一部のエッセイのみが中国語に翻訳されたが<sup>1</sup>、研究者には注目されなかったようである。つまり、1949年までは中国における川端文学の研究は空白であった。中華人民共和国が成立してからも、文学研究者は日本のプロレタリア文学だけを重視し、内容が複雑な川端の小説を依然として研究と翻訳の対象としていない。

## 2. 1966年から1978年の状況

1966年から1970年代初期まで、文化大革命の大きな打撃を受けた中国では、日本文学の翻訳と研究はほぼ全面的に停滞した。1972年の日中国交正常化以降、日本文学の研究がようやく再開したが、小林多喜二などプロレタリア文学作家にのみ注目が集まった。この期間、川端康成と関係の深い三島由紀夫が、中国で知られるようになったため、川端も三島と共に中国の研究者らによって軍国主義批判の材料とみなされた。

1978年、『外国文芸』創刊号で川端の短編小説『伊豆の踊子』（侍桁訳）と『水月』（劉振羸訳）が発表され、訳者侍桁は川端を「新感覚派の作家代表」としてその作風を紹介した。約26年後の2004年、王志松は「侍桁の紹介はノーベル文学賞受賞作家で、新感覚派作家としての川端康成を特に取り立てたもので、新感覚派の主な文学的特徴を述べ」たものだが、「『伊豆の踊子』という作品を新感覚派文学の代表作として紹介することは妥当ではない」として、むしろこの小説は「文体の新しさと主人公の感受性に対する表現が最大の特徴なのに、侍桁の紹介はこれらの特徴を無視している」<sup>2</sup>と指摘している。侍桁の評価は、バランスの取れていないものもあるが、建国後最初の川端評論といえる。それ以降、川端小説に関する大規模な中国語翻訳が始まり、文学研究者にも重視されるようになった。建国後30年が経ち、中国の川端研究は徐々に脚光を浴びるようになった。

## 3. 1979年から2009年の研究状況

1980年代直前、中国の川端研究は、「改革開放」と共に歩み始めた。1979年9月、日本文学研究会の学術組織である「日本文学研究会」が設立され、長春で日本文学研究会が開催された。提出された30本ほどの論文に、川端文学に関する評論が

1 欽鴻「範泉著訳書籍聞見録」『出版史料』2011年第2期、120頁によれば、1942年範泉の翻訳した川端康成のエッセイ「文章」が上海復旦出版社により出版。

2 王志松「川端康成与八十年代的中国文学——兼論日本新感覚派文学对中国文学的第二次影響」『日語学習与研究』2004年第2期、54頁。

現れた。これは、中国における川端研究の初登場である。川端の小説の翻訳も1970年代末から1980年代初期にかけて急速に活発化した。1981年、上海訳文出版社と山東人民出版社は侍桁が翻訳した『雪国』と、葉渭渠、唐月梅が翻訳した『古都 雪国』をそれぞれ出版した<sup>3</sup>。その後、翻訳は系統的になり、全面的な翻訳につながった。川端研究も徐々に規模を広げていった。

1970年代末以降、文学研究界では、文学が社会に及ぼす作用の単一的認識や、文学のヒエラルキーを強調する偏りは徐々に消え始めた。しかし、1980年代初期、文学を政治闘争の道具として、文学のもつ「階級性」を強調する見解はまだ健在していた。川端研究においても、安易で独断的で、社会批判的な視点から批評され、ある論文は、道徳的評価と階級差別をもって、川端文学を全面否定したこともあった。たとえば、1978年の改革開放後、最も早く翻訳・研究された『雪国』を例にとれば、ある研究者は主人公駒子を自墮落的で、自ら男性の慰みになる娼婦だと評した。また、これを理由に『雪国』に対して政治的価値判断を下し、この作品を墮落賛美だと決めつけた<sup>4</sup>。このような意見は、1980年代前期の川端研究において相当な割合を占めていた。しかし、注意すべきなのは、この時期の川端文学にたいする評価はすでに様々な方向から進んでいることである。つまり、同じ作品に対して異なる意見が見られるようになった。たとえば、『雪国』に対して、ある研究者は政治的物差しを超えて、芸術性から分析し、駒子を日本的な伝統美の持ち主とし、彼女の墮落の原因を社会の問題から探り、資本主義の問題だったと指摘する<sup>5</sup>。

1985年、日本国際交流基金と元国家教育委員会が共同で、北京外国語学院に「日本学研究センター」（現在の「北京日本学研究センター」）を創立した。このような機構の設立は、中国における日本文学の研究を大きく推進し、川端研究にも拍車をかけることになった。1980年代後半、文学についての観念の変化があり、研究者は川端の小説の中の個人的経験や審美的特徴に目を向け始めた。ある研究者は、川端文学に内包された純真で淡い美しさを強調し始め、例えば李徳純は『伊豆の踊子』で繊細に描写された、抑圧された刹那の感情の美しさを分析した<sup>6</sup>。

中国では、川端文学に対する価値判断は両極に別れるが、川端文学の作風と技

3 ほかに、川端の短編の翻訳は文学雑誌や選集にみられる。例えば『母の初恋』（葉渭渠訳『日本短編小説選』所収、人民文学出版社、1981年版、596-624頁）など。

4 李芒「川端康成『雪国』及其他」『日語学習与研究』1986年第1期。

5 平献民「談『雪国』的芸術特色」『外国文学研究』1982年第4期。

6 李徳純「川端康成的『伊豆の舞女』」『読書』1983年第8期。

巧についての評価は基本的に一致し、その芸術性を、程度の差はあるが、ほとんど肯定している。川端の西洋現代派の技巧を用いた効果的な表現方法と、日本の伝統との融合を絶賛している。文学研究におけるこのような肯定的評価は、実際、1980年代中国全体の人文研究の状況と切り離せない。長期にわたる思考の束縛から解放された研究者たちは、ようやく視界が開けて、現実主義と階級批判と完全に異なる斬新な文学的体験をし、西洋文芸思潮の流入とともに、かつてない興奮を覚えた。川端がノーベル文学賞を受賞したことを、西洋文学の現代的技巧を取り入れた最高の成功例とみなして、中国の文学研究者たちは川端文学を重要な研究対象とみるようになった。例えば、王育林「川端康成与超现实主义」<sup>7</sup>のように、研究者たちは川端文学における伝統と現代との融合を研究課題とする傾向が大きい。

1980年代、川端文学に関する大量な論文が様々な学術誌に発表されたにもかかわらず、研究専著の出版が立ち遅れた。林武志編著『川端康成戦後作品研究史・文献目録』の「海外研究文献目録」の統計によれば、日本以外における1984年までの川端研究は、台湾で出版された中国語版『日本の美与我』（台湾商務印書館、1968年）のみであったが、訳者喬炳南の書いた「川端康成伝」（26-58頁）は短いものであった<sup>8</sup>。中国大陆で初めて専著として出版されたのは葉涓渠の『東方美的現代探索者—川端康成評伝』（1989）であった<sup>9</sup>。この本は「川端の思想と作品を全面的に評論した初めての学術書であり、中国の川端文学研究史上において画期的なものである」と評価されている<sup>10</sup>。

全体的にみれば、1980年代の中国における川端研究は、批評の方法は単一で、研究対象も狭く、大部分は『伊豆の踊子』や『雪国』などの代表作に集中している。1990年代に入ると、中国の経済構造の変化と発展が加速し、購買意欲も強くなり、多くの出版社は経済利益と社会公益を考慮し、影響力のある日本人作家の個人作品集を出版する傾向をもつようになった。例えば、1996年中国社会科学出版社が10巻の『川端康成文集』を出版している。一方、余華、莫言、賈平凹など1980年代中国の文壇を率いた作家たちは、1990年代に入ると安定した地

7 王育林「川端康成与超现实主义」『解放軍外国語学院学報』1985年第3期。

8 林武志編『川端康成戦後作品研究史・文献目録』教育出版センター、1984年、336-349頁。

9 葉涓渠『東方美的現代探索者—川端康成評伝』中国社会科学出版、1989年。

10 李先瑞「川端文学在中国的翻譯与研究（上）」『日語知識』1999年第4期。

位を築きあげて、自分の創作は川端文学の影響を受けたと言明し始めた<sup>11</sup>。これらの明言は、中国本土作家の創作が外国文学によって刺激されたことを示している。川端研究はこのような背景の下で発展し続け、中国の研究者たちも彼の各時代の文学創作を全面的に理解しようとし、川端文学に関する研究論文も日に日に豊富になっていった。

1990年代以降、川端文学に対する研究は、社会批評的な方法を脱した。研究者たちは、川端文学の複雑性を認め、その要因を研究し始め、研究方法に進歩が現れた。時代の進歩とともに、川端文学の芸術性を取り上げることが研究の中心になり、多くの論文はテキストの精読を通して詳細に分析し、多角的に検討するようになった。例えば、張石は川端の創作した「死」のもつ東洋的美意識を論じ<sup>12</sup>、何乃英は川端の小説の芸術性を検討し<sup>13</sup>、何文林は川端文学の美を伝統、個人、時代という側面から分析し<sup>14</sup>、王奕紅は『雪国』を通して、川端文学の美意識を探究<sup>15</sup>。しかし、その後の研究に比べると、この段階の川端康成の芸術に対する探求は、深化の余地がまだまだ大きかった。

研究上で、人々の思想や観念が解放され、日本文学の翻訳もだんだん多角的に発展していった。作家の主観に基づく翻訳・批評は唯一の評価基準ではなくなり、多角的に同じ作家の違う作品に対して分析と評価を行った。研究対象としての川端小説は戦後作品群、晩年の作品群に広がった。例えば、譚晶華は『山の声』を中間小説として論じ<sup>16</sup>、肖四新は後期の作品群を分析し<sup>17</sup>、李希華は初期の児童小

---

11 例えば、余華は「川端康成とカフカの遺産」の中で、「1982年浙江省寧波甬江の隣にある古いマンションで私は初めて川端康成の『伊豆の踊子』を読んだ。そのとき偶然読んだおかげで、私は正式に創作活動を開始したのである。そして、1986年春まで川端への情熱は尽きない。その間、私は川端作品の翻訳版をすべて読破した。川端作品をすべて2冊ずつ購入し、1冊は保存用、もう1冊は枕元において閲覧用とした」という（『外国文学評論』1990年第2期）。賈平凹は川端康成のおかげで「多くの現代派哲学、文学、美学方面の本を読んだ」と認めている。「川端康成が東洋の作家として、西洋の現代派のものと、日本民族的な伝統を融合させ、新しい世界観を作り出したことに私は深く感銘を受けた」という（賈平凹「平凹答問録」『商州—説不完的故事4』華夏出版社、1995年、527頁）。王小鷹も「从川端康成到托爾斯泰—外国文学与我」（『外国文学評論』1991年第4期）で川端文学が彼自身の出发点だと述べる。

12 張石「死之美的東方性—談川端康成創作的一個美学特征」『日本学論壇』1991年第3期

13 何乃英「論川端康成小説の芸術特征」『北京師範大学学报』社会科学版1995年第5期。

14 何文林「伝統 個人 時代—川端康成小説の芸術美」『天津師範大学学报』社会科学版1996年第1期。

15 王奕紅「从『雪国』看川端文学的美学意象」『当代外国文学』1997年第3期。

16 譚晶華「典型的中間小説—論川端康成『山之聲』的創作」『解放軍外国語学院学报』1996年第6期。

17 肖四新「本真生命的追求与探尋—論川端康成後期作品的實質与價值」『外国文学研究』1997年第1期。



説を研究している<sup>18</sup>。かつてひどく批判された川端康成の小説も新たな評価を得た。例えば、劉勁予はいままでの『眠れる美女』を墮落した色欲の強い作品とされた見解に反対し、その「美的意義と価値」を肯定し、その小説で川端は「醜を美に転換する芸術を追求し」、「醜の鑑賞を通じて、醜を否定し、精神的超越と心の浄化に達し、さらに美の意義を再確認する」ものだと指摘した<sup>19</sup>。このように、『眠れる美女』のような議論を呼ぶ作品への新たな評価のブームが21世紀以降起こった。

研究の視点もかつてない新局面を迎えた。例えば、範川鳳は、中国の読者が読み慣れた現実主義的な正統の作品と違う川端の「鏡を見るような視覚的手法」は「読者にとって作品を理解する障害」になることもありえるだろうという見解を示している<sup>20</sup>。丁武君は川端の小説にある「赤と白」「黒と白」という色の組み合わせの象徴的意味を通じて、川端の創作の方法を分析している<sup>21</sup>。谷学謙は『抒情歌』、『美しさと哀しみと』などの女性主人公を分析し、川端文学が受けた仏教的唆を論じている<sup>22</sup>。鄭忠信は視覚の美学から川端の人生と作品中の死亡との因果関係を詳説している<sup>23</sup>。よく研究されている作品、例えば『伊豆の踊子』に関しても、陳齡のような研究者は新しい角度から分析をしている<sup>24</sup>。

1990年代の川端研究はもうひとつ重要な特徴がある。例えば、李芒の「日本文学在中国的翻訳和評價」<sup>25</sup>、李先瑞の「川端文学在中国的翻譯与研究（上、下）」<sup>26</sup>、孟慶枢の「川端康成研究在中国」<sup>27</sup>など、研究史を整理、総括する試みが発表され始めた。これは、今まで積み上げてきた多くの研究成果を概説すると同時に、この研究分野に対する回顧と反省の必要性を意識していることをも意味する。

1980年代と違うのは、1990年代に入ってから、川端文学研究の専著が出版されるようになり、10冊あまりに達していることである。前述の葉渭渠著『東方美的現代探索者—川端康成評伝』（1989）をもとに、1996年に増刷版『冷絶文士

18 李希華「川端康成早期児童小説評述」『遼寧教育学院學報』1996年第1期。

19 劉勁予「試論川端康成『睡美人』的美學意義」『廣東教育学院學報』1995年第4期、25-27頁

20 範川鳳「川端康成の鏡子視覚技術」『外国文学研究』1994年第1期、24頁。

21 丁武君「川端康成創作中色彩の表現模式及其象征性」『外国文学研究』1994年第4期。

22 谷学謙「川端康成与仏教」『外国文学研究』1999年第4期。

23 鄭忠信「黑色楽章—川端康成死亡論」『外国文学研究』1997年第3期。

24 陳齡「『伊豆の舞女』中的情愛描写」『当代外国文学』1997年第1期。

25 李芒「日本文学在中国的翻譯和評價」『日本學刊』1992年第5期。

26 李先瑞「川端文学在中国的翻譯与研究（上、下）」『日語知識』1999年第4、5期。

27 孟慶枢「川端康成研究在中国」『外国文学研究』1999年第4期。

一川端康成伝』が中国社会科学出版社から出版された。作者葉涓渠は川端文学の翻訳と研究に貢献している。彼はまず川端文学の芸術性に着目し、「どのように川端文学の構造と美の方程式を解くか、川端文学はどのような地位を示すべきかは、おそらく川端研究においてまず取り組むべき問題だろう」という考えをもっている。そこから出発して、川端文学の伝統性と現代性との要素を探り、国別の文学研究という従来の分離状態を突き破り、「西洋と東洋の文学を比較した上で、日本民族の文化的根源は何か」というより根本的な問題に対する研究に尽力した。彼は「川端文学の二重ないし多重的構造は非常に複雑で美しい方程式をもち、一般的な方法や単一的な研究方法による解明は難しい」と考えている<sup>28</sup>。これは川端文学の「日本文学とは日本だけではなく、東洋的で、さらには西洋的性質をも併せ持つ」という氏の主張にもつながっている。

中国の大学において、比較文学の学科が成立し、発展するにつれて、1997年に元国家教育委員会は独立していた「世界文学」と「比較文学」とを併合し、「比較文学と世界文学」という学科に再編成した。日本文学と中国文学を対象とする比較文学者たちは、一斉に専門領域と国家の違いを乗り越え、比較文学の研究方法を利用して川端研究を繰り広げていく。

この中で、中国大陸唯一の比較文学専門誌『中国比較文学』は大きな役割を果たした。この雑誌の1994年第1期に孟慶枢は川端文学がいかに世界的に干渉されているのかを論じ<sup>29</sup>、1995年第1期に于長敏は川端文学と朱自清の作品を比較し<sup>30</sup>、文潔若は川端の『水月』と沈從文の『阿金』を比較している<sup>31</sup>。ほかに、川端文学の影響を受けたと名言している中国人作家を取り上げる研究がある。例えば黄嗣は賈平凹と川端を<sup>32</sup>、俞利軍は余華と川端を比較している<sup>33</sup>。または川端文学とアジア、欧米文学との関係に注目する研究者がいる。例えば喬麗媛はタゴールと川端を比較し<sup>34</sup>、甘麗娟は川端とヘミングウェイを比較している<sup>35</sup>。

川端研究におけるこのような比較文学の方法は、2000年代まで続き、グローバルイズムの影響を受けて、21世紀にさらに発展した。しかし総じていえば、表

28 葉涓渠「川端文学研究的幾点思考」『日本文学刊』1993年第4期、第94、95、97頁。

29 孟慶枢「从比較文学角度看川端康成走向世界」『中国比較文学』1994年第1期。

30 于長敏「独到的芸術魅力—作品中的典雅美 川端康成与朱自清的作品比較」『中国比較文学』1995年第1期。

31 文潔若「川端康成的『水月』和沈從文的『阿金』」『中国比較文学』1995年第1期。

32 黄嗣「賈平凹与川端康成創作心態的相關比較」『湖北大学学报』哲学社会科学版、1995年第3期。

33 俞利軍「余華与川端康成比較研究」『外国文学研究』2001年第1期。

34 喬麗媛「泰戈尔与川端康成人生觀及其創作比較談」『遼寧教育行政学院学报』1993年4月。

35 甘麗娟『戦争 女性 死亡—川端康成与海明威創作個性比較』『日本研究』1996年第1期。



面上の平行的な対比に止まり、文学と文化の深層まで掘り下げる、本当の意味で比較にはなっていないようである。昨今、新しい研究が行われている。例えば周閔『川端康成文学的文化学研究』（2008）<sup>36</sup>は、東アジアの文化的文脈における川端文学と中国文化との関係を掘り下げ、川端文学と仏教・美術・囲碁、中国哲学、中国文学との関係に着目し、比較文学的手法をもって川端文学の成立の過程と芸術様式の形成の根源を論じている。

21世紀以降、川端研究に注目すべき現象が現れた。川端の小説は日本の若い世代にあまり読まれなくなったが、中国の若い研究者の間で注目を集め始めた。最も典型的なのは、川端文学に関する大量の修士論文と博士論文が発表されていることである。学術論文検索サイト「中国知網」で調査した限り、川端文学をテーマとする「優秀修士論文」は35本以上あったことがわかる<sup>37</sup>。このほかに、無視されがちな川端の「掌の小説」の研究も大きな成果を得ている。

これと同時に、川端の人生体験と創作意識を結び付け、作家の美意識の形成と発展の軌跡を明らかにする研究専著が出版されている。周閔の『川端康成是怎样讀書写作的』（2000）<sup>38</sup>は、1997年初公開の川端康成と三島由紀夫の手紙などを最新資料として参考し、川端の思想と芸術とを結び付け、広い視野に立って、伝統性と現代性の文化的根源、東洋文化と西洋文化の衝突の中における川端の文芸思想の形成の過程を丹念に辿った。また、劉象愚・胡春梅の『感悟東方之美——走進川端康成的「雪国」』（2007）はアジアの美意識と『雪国』との関係を論じる<sup>39</sup>。このほかに何乃英の『川端康成小説芸術論』（2010）は思想、創作方法、表現のテクニク、芸術様式という四つの側面から、川端康成の芸術を概括的に分析している<sup>40</sup>。

#### 4. 結 び

日本の研究界と比べれば、中国の川端研究はまだ視野が狭く、一部分の作品に偏り、川端文学の全体的な把握と分析は不足している。もちろん、中国語訳の川

36 周閔『川端康成文学的文化学研究——以東方文学為中心』北京大学出版社、2008年。

37 この統計は、2010年までの「川端康成」を表題（副標題を含む）、キーワードに含む論文に基づく。

38 出版前の原題は『川端康成的人生歷程与創作歷程』だったが、北京大学の楽薰雲教授編の叢書「国外文化名人生平創作研究」に入れられ、出版社に統一されて現題になった、という経緯がある。

39 劉象愚・胡春梅『感悟東方之美——走進川端康成的『雪国』』北京師範大学出版社、2007年。

40 何乃英『川端康成小説芸術論』北京師範大学出版社、2010年。

端康成全集がまだ出版されていないこととも関係がある。また、資料採集の広さと深さ、テキストの精読においては日本の研究界と大きな差がある。したがって客観的に川端文学の本質と特徴の形成を明らかにするには、大変な努力が必要である。

日本では川端研究史を定期的に検証し、文献整理に関わる大量の作業をし、川端文学の作品目録の作成も行っている。これに対して、中国では作家とテキストの研究に重点を置き、とくに後者の研究が盛んである。中国語訳の川端作品の整理と文献の収集、中国の川端研究史の整理においては、体系的な成果は少ない。

日本と中国の川端研究の共通点は、作家・作品の研究のみを行い、また西洋文化との関連性によく注目しているが、川端の作品に取り入れられた他の東アジア諸国の文学と文化の要素がほとんど無視されていることである。川端文学に関する比較文学は、中国と日本とはほぼ同じレベルにある。中国の比較研究の開始は遅れたが、研究の勢いは大きい。比較研究においては、日中両国は多くの類似点がある。例えば、多数の論文と著作は「新感覚派」と日本伝統という二つの面に集中し、また川端の吸収した西洋の文芸思潮の分析に力を入れている点である。しかし、川端文学と中国文化との関係に関する両国の研究はまだ少なく、体系的な成果は少ない。川端研究が最も進んでいる日本においても、2005年に初めて康林の『川端康成と東洋思想』<sup>41</sup>が刊行された。その2年前の2003年、中国の有張石の『川端康成与東方古典』が出版されて、川端文学を東洋文化との関係から研究している<sup>42</sup>。しかし、この2冊はどちらも川端文学と中国文化との関係性について述べる章は1章のみである。

古代以来、日中の文化交流は、日欧交渉より遥かに長く頻繁で、中国及び他のアジア諸国の文化を受け入れて形成した豊かな土壌こそが川端文学の基礎といえよう。したがって、川端を研究するうえで、東洋文化の、特に中国文化からの影響は無視するべきではない。川端は上手に異文化の要素を取り入れた作家と認められている。彼は外国の文学と文化によく接触し、取り入れたものに独自性を付け加え、ユニークな作品を仕上げている。川端の芸術の特徴を研究するために、

41 康林『川端康成と東洋思想』（新典社、2005年）は4章に分けられ、「川端文学と老庄思想」、「川端の文学理論」、「初期作品試論」、「『雪国』序論」からなり、第1章にのみ川端の受けた中国文学の影響を論述しているが、ほかは主に短編作品を対象に取り上げている。

42 張石『川端康成与東方古典』（上海古籍出版社、2003年）は4章からなり、「川端康成的生活」、「川端康成的美学」、「川端康成与東方古典專論」、「作品專論」となり、第三章のみが『南方の火』と『山の音』を中心に川端文学と中国易学との関係、『眠れる美女』と禪宗との関係を論じる2節がある。

次のことに注意しなければならない。作品鑑賞にだけ専念するのではなく、また国別の文学の枠組みをも超えて、広い文化的視野をもって、異文化的視点から異民族の文学要素にも注目し、また文学以外の芸術がどのように川端文学に組み込まれているのか、どのような作用を持っているのかを明らかにする必要がある。

川端康成は、最高レベルの美を作り上げる作家であるため、川端研究はその文学の美意識を無視してはいけない。文学作品は作者の芸術的感受性から生まれたものであり、文学研究者も同様な感受性が望ましい。テキストに現れた美意識に対する分析は文学研究の最も基本的な方法のひとつであり、川端研究は特にそうである。今後の川端研究はまだ発展する余地が多く、さらなる成果が非常に期待されている。